

『主が私たちの味方です』詩篇124:1-8

124:1 今、イスラエルは言え、主がもしわれらの方におられなかったならば、

124:2 人々がわれらに逆らって立ちあがったとき、主がもしわれらの方におられなかったならば、

124:3 彼らの怒りがわれらにむかって燃えたとき、彼らはわれらを生きているままで、のんだであろう。

124:4 また大水はわれらを押し流し、激流はわれらの上を越え、

124:5 さか巻く水はわれらの上を越えたであろう。

124:6 主はほむべきかな。主はわれらをえじきとして／彼らの歯にわたされなかった。

124:7 われらは野鳥を捕えるわなをのがれる／鳥のようにのがれた。わなは破れてわれらはのがれた。

124:8 われらの助けは天地を造られた主のみ名にある。

●序論

「神秘」

人間は結局神秘を求めているのではないか。

数学者も 物理学者も 哲学者も 芸術家も 音楽家も

結局は神秘を求め 神秘に触れようとものがき 苦悩し のたうち回っているのではないか

神秘。 それは神の世界の 真であり 善であり 美であり 聖である

それ以外のものではありえない。 それは つまり神なのだ。

…

わたしは、この詩の「味方」という言葉を「神秘」に代えて当てはめるとまた、人の求めているものがわかるのではないか…そんな風に感じました。

多くの人が、この世に生きている中で、自分の人生やありさまを認めてくれ、そして生きていていいんだよ、あなたには意味と理由があるんだよ、わたしはあなたの味方だよ、と言ってくれる存在を探しているのではないか。

実はそれが、イエスさまなんじゃないか、それはまさに「神秘」なのかもしれないと。人や国が、「味方さがし」「味方づくり」を模索しているというニュース

知者、権力者、政治家、策略家が、うごめき、ひたすら、力を、見方をと求めている。でも本当にかげがえのない味方は、” 天地万物の造り主なるまことの神さまなのだ”、そのことを忘れてはいないか？

今日、お読みした聖書の箇所は、そう語っているように思います。

(新改訳) 124:1 「もしも主が私たちの味方でなかったなら。」 さあ、イスラエルは言え。

それは、本当にかげがえのない味方を忘れてはいないか！？ 思い出せ、もし神がおられなかったら、どうなっていた！？と気づきを促しているのです。

先ほどの詩を、少しフレーズを変えてみました。

…それ以外のものではありえない。それは つまり神なのだ。

しかし多くの者は 味方を得ようとして、本当の味方が誰であるかを知らない。
わたしは凡人にすぎない なのにイエスさまによって 神が味方であると気づいた

それを大切にしていこう どんなことがあっても 大切にしていこう
心から「主がわたしたちの味方です」と告白できる信仰者は本当に幸いです。

●本論

I. 至るべき破滅があった、けれども！

先ほどの詩集は、溝の口の仁井田義政先生が十代から、書き綴ってきた詩集の一片です。

そこには、その詩を書いた年月日が記されており、イエスさまを信じる以前の暗く悲惨な境遇、荒れ果てた生活の中でのものから、救われてから書き綴ったものがあります。

「冬の林」(救われる前)

この冬の空に出た太陽に 枯葉をふるわす木枯らしに
足に絡みつく一枚の木の葉に 私に対する教訓を見いだせなくなったら
冬の空に黙して立っているこの樹木に わたしは首を吊って死のう
わたしの魂の呻きと共に

死に対する憧れを持ち、自暴自棄になっていた少年時代の詩です。

先生は、先日ご自分の自伝を送ってくださいました。それを読み始めて、ああ、まさに滅びからの救いがある、先生は、救われたのだ！そう感動したのが実際です。

「仁井田少年、本当に死ななくて良かったね！」と。

今日読んだ詩篇は、124:1 「もしも主が私たちの味方でなかったなら。」と語り始めます。

もそうなら、自分の弱さを絶望的な滅びが飲み込んで、終わっていただろうと。

(新改訳)

124:2 「もしも主が私たちの味方でなかったなら、人々が私に逆らって立ち上がったとき、

124:3 そのとき、彼らは私たちを生きたまのみこんだであろう。彼らの怒りが私たちに向かって燃え上がったとき、

124:4 そのとき、大水は私たちを押し流し、流れは私たちを越えて行ったであろう。

124:5 そのとき、荒れ狂う水は私たちを越えて行ったであろう。」

わたしたちは今、守られてここにいます。以前は、滅びと絶望にあったかもしれない。けれども、神はその滅びに向かうわたしたちに手を伸べお救いくださったのです。

Ⅱ. わたしたちの主が、滅びに立ちはだかった

新改訳)

124:6 ほむべきかな。主。主は私たちを彼らの歯のえじきにされなかった。

124:7 私たちは仕掛けられたわなから鳥のように助け出された。わなは破られ、私たちは助け出された。

「もしも主がわたしたちの味方でなかったら!？」という問いかけを真剣に、自分の人生で思いめぐらすことの大切さを、今日御言葉はわたしたちに向かってチャレンジしています。

仁井田先生の伝記序文、自分の生い立ちと、この伝記の目的を記しておられます。

人は生まれる環境を自分で選択することは出来ない。わたしの生まれ育った環境は、決して恵まれた者でなかった。わたしが生まれると間もなく父と母が離婚。厳密に言えば離婚でもない。そのことは後に記している。

母の手一つで三人の男の子を育てる貧しい生活。二人の兄たちは若くしてヤクザの世界に入っていった。そして私が7歳の時に、私の唯一の心の支えであった母の死。深い不安の中で、わたしは見たこともない父親のところに引き取られていく。

その父親は、私を虐待する人であった。そのために、いつも父の暴力におびえて生きなければならなかった。わたしは小学2年生の時から、あまり学校に行かせてもらえず、仕事をさせられる労働力に過ぎなかった。

- わたしがこの本を書くことにした理由は、そのような中で人の一生が必ずしも不幸になってしまうのではないことを知ってほしいからである。わたしは人生で精神的に最悪な状況の時に、イエスさまにお会いした。そのことが起点となって、私の本当に人生が動き出したのである。

イエスさまは、仁井田先生の滅びに向かう人生に立ちはだかって、その罪を贖い、ゆるしを宣言し、その深く豊かな愛の注ぎをもって、なやみと生い立ちの劣等感、悲しみと不安、絶望、孤独から救い出してくださったのです。

ローマ5:8 しかし、(わたしたちが) まだ罪人であった時、わたしたちのためにキリストが死んで下さったことによって、神はわたしたちに対する愛を示されたのである。

»だから、はっきり、わたしたちは告白することができます。

Ⅲ. 主が真実、わたしたちの味方である

今日の詩篇124篇は、ダビデ個人の経験であり、またイスラエルの民の経験でもありました。そしてそれは、またイエス・キリストによってはっきりとその愛と真実を知った、新約時代を生きるわたしたちの経験でもあるのです。

ローマ8:31-32

8:31 では、これらのことについて何と言ったらよいだろうか。もし神がわたしたちの味方であるならば、だれがわたしたちに敵対できますか。

神がわたしの味方である。それがわたしたちの人生の物語になっています。

先ほどの仁井田先生の伝記の初め、その続きにはこういう問いかけがありました。

-人間はあたらしく生まれかわることなどできないのであろうか？

これはその物語である。…

わたしにも歴史がある。それはわたしの内に、神さまが生きておられるということである。これから書き綴る物語は、わたしの人生に働いた「神の物語」なのである。

本物の神さまは、本物の神秘は、わたしたちの側で作れるものではありません。いや私たちは、神さまを見いだすことこそが大切なのです。

その神秘、それは神さまがわたしたちの主となってくださる、味方となってくださるということです。

どこでそれに気づき、そして見いだすのでしょうか？

実はすでに与えられているのです。イエス・キリストを通してわたしたちに与えられているのです。

ローマ8:32 わたしたちすべてのために、その御子をさえ惜しまず死に渡された方は、御子と一緒にすべてのものをわたしたちに賜らないはずがありませんか。

今日、改めて詩篇の問いかけに耳を傾けましょう。

(新改訳) 124:1 「もしも主が私たちの味方でなかったなら。」(どうなっていたでしょう?)

でも答えがある。

(新改訳) 124:8 私たちの助けは、天地を造られた主の御名にある。